

「学び」は、学校だけのものではなく、社会のさまざまなところから生まれはじめています。これらの学びの最前線では、何が起ころい、どんなことが考えられているのだろう。学びのフロンティアで活躍する4人の皆さんにインタビューしてみました。

松下電器産業株式会社 コーポレートコミュニケーション本部 社会文化グループ メセナ担当

田中 典子さん

自然なカタチで芸術文化との 出会いをサポートしたい



企業から

松下電器産業では、社会貢献活動の一環として芸術文化への支援を積極的に行う一方、社員に対するマネジメント教育、職能教育、そして文化芸術に関する教育活動も盛んだ。さまざまな分野で活躍しているアーティストを招いて話を聞く、「カルチャートーク」もその一つ。その企画立案者である田中典子さんに、松下電器の「学び」に対する考え方や、田中さん自身の「学び」体験などをつかかった。

「カルチャートーク」を始めたきっかけ

「カルチャートーク」は主に社員とその家族を対象に、第一線で活躍しているアーティストや芸術文化の創造にかかわっている方々を招いて、96年から年数回のペースで開催してきました。会場は松下の東京拠点 御成門の会議室が多く、テーマによっては美術館やギャラリー、

コンサートホールなどで開いてきました。

私は松下グループの社会貢献活動を行う部門で、芸術文化分野への支援（メセナ）を担当しています。「カルチャートーク」を企画したのは、そうした仕事を通じて知り合ったアーティストの方々のお話に私自身が感動し、素晴らしい話をひとり占めするのはもったいない、社員の方々とその感動を共有したい、と思う

たのがきっかけです。その思いが、社員に芸術文化と触れる機会や場を提供していくという形になったのが、「カルチャートーク」です。

「カルチャートーク」で感じるのは、アーティストや博物館・美術館の学芸員といった講師の方々が、熱心に勉強されているということ。たとえば、参加者の一人が演出家の蛭川幸雄さんに、「どうし

たら、そんなにアグレッシブにいろいろな作品を生み出すことができるのか」と質問すると、答えは一言「勉強していますから」でした。すぐれた芸術の土台には、地道な学びの姿がある。聞きに来た社員の感想も、専門分野のみならず、いろいろな分野で勉強されていてびっくりした」というものが圧倒的でした。

「欲」が学びへの大きな原動力

実は私自身は、この仕事に就くまで芸術や文化といったジャンルには、とりたてて言うほどの興味はありませんでした。変わったのは、社会文化グループに異動になったとき、ある方に「今見たり、聴いたりしておかないと3年後に損をするよ」と言われたり、社内外の方とお会いしたときに話についていけず、悔しい思いをしたことがきっかけです。直属の上司になった方が毎日何か見ているので、その影響もありました。きつと欲が出てきたのでしょね。私にとって、「欲」は、学ぶための大きな原動力になってい

るように思います。

アートに触れたいという欲求は強い

「カルチャートーク」を聞きに来る社員は、管理部門にいる50代の男性と、20代、30代の女性が多い。営業部門にいる30代、40代の男性は、時間にゆとりがないのか、参加する人は少ないです。カルチャーの分野に関する限り、女性の方が学びへの意欲が高いように思います。



新潮劇院の張春祥氏による「京劇入門講座」

社内的に見ると、勉強している人は、英語などの語学や資格取得のためという人が多い。とくに最近では、不況のせいもあって、仕事や業務に直結することを学びたいという意識が強いようです。芸術の分野にまで手が回らないというのが実状なのかもしれません。

確かに、芸術文化は必要不可欠なものではありません。舞台や絵画がなくても生きていけます。けれども、その一方で、第二次世界大戦直後に人々が最も渴望したのがアートだという調査結果を読んだことがあります。アートは飢えている人々を直接救うことはできないけれども、心をいやし勇気づけることはできる。



岡本太郎記念館の館長、岡本敏子さん（右端）にお話をうかがう

アートが求められた理由もそこにあつたのだと思います。

もちろん、現代はそれほど枯渇した状況にあるわけではありません。アートが二の次にされるのは、まだまだ余裕がある証拠なのかもしれません。しかし、無料チケットに対する申し込みが急増しているという事実もあります。不景気でチケット代を節約したいという理由も大きいのだと思いますが、こうした状況を見る限り、人々の芸術文化に触れたいという欲求は、決して衰えていないように思います。長引く不況で世の中のムードが殺伐としている中、人々は何か心をいやせるものを渴望し、そうした流れが芸術や文化に向かっているのではないでしょうが。

「ものづくり」の原点に共通するもの

松下電器には、「企業は社会の公器」という考え方がベースにあります。そして、社会貢献活動は企業の大切な使命の一つとして考えられています。芸術文化に対する支援も、そうした理念に基づいたものです。

ただ、「この活動を受け手側に強要はしたくない」「カルチャートーク」なども、数字のよつに目に見える成果を出さずとも

すれば、動員をかけて参加者を増やすこともできるのですが、それは避けたいと考えています。基本的に見たい人が見る、聞きたい人が聞くといい、個々人の自主性を大切にすることが、学びの本来の姿だと思うからです。仕事に直接結びつかなくても、日々の生活が豊かに深くなり、そのことが今求められている創造的な仕事への発想につながれば、と思います。実際、発想の転換のヒントを与えてくれるアーティストの話は、私たち松下にとっても参考になることが多く、ジャンルは違っても、「ものづくり」という原点に流れる精神は同じものなのだと感じます。

ですから、押しつけではなく、より自然なカタチで芸術や文化との出会いの場をサポートしていけたらと考えています。その結果、自分でチケットを購入して、足を運んだり、何かを学び始めるきっかけになれば、これほどうれしいことはありません。

たなか のりこ
1992年に社会文化グループに異動し、94年まで東京グローブ座支援活動の専任を務める。その後、芸術文化分野全般、および国際交流分野における支援を担当。「カルチャートーク」をはじめ、数多くの自主事業を企画推進し、現在に至る。今は勤務のかたわら、大学の通信教育で学芸員課程を履修中。身をもって生涯学習を実践している。

横浜市教育委員会事務局 生涯学習課 生涯学習推進係 / T・G・A・Lメンバー
竹原 和泉さん

生涯学習にかかわるすべての人が 納得のいく場にしていきたい

学習には、学習者、学習を支援する者など、さまざまな人々がいろいろな形でかかわりあっている。竹原和泉さんは、フランス、アメリカでの自主学習の仕掛け人、自主学習グループのメンバー、横浜市の生涯学習課勤務など、いずれの立場にも立ったことがある。そうした経験に基づき、竹原さん自身の生涯学習に関する考え方をうかがった。

生涯学習との出会い

私が学校教育以外で何かを「つかんだ」と思ったのは、大学時代に岩手県田野畑村や福島県山都町で子ども会や青少年交流などの地域活動をしたときでした。「何かをしてあげる」という気持ちで、4年間通いつめるうちに、「自分自身が育てられた」という感覚に変わり、とても強烈な経験となりました。それがきっかけで、「社会教育の道に進みたい」と思うようになったのです。

的な学習活動にたずさわるようになったのは、退職後の子どもの出産や、夫の転勤にともなう海外生活がきっかけです。フランスでは他のお母さんたちと、日本人駐在員の子ども向けに、現地の幼稚園が休みの水曜日を利用して、読み聞かせや季節のイベントを行ったりしました。また、自宅を開放して講師を招き、日本文学講座なども開きました。アメリカでは住まいのあったニューヨーク州エッジモントで、PTA活動をしたり、ボランティアをするなど、地域でやれることにはなるべくかかわってきたつもりです。どの地域に住んでいても学習の場を持つことをつねに意識して活動してきま



市民から

CITIZEN

した。そのことが現在の生活や活動の大きなベースとなっています。
 アウトプットが学びにつながる

アメリカから帰国後、横浜市都築区の社会教育指導員として、働きはじめました。この地域は海外転勤族も多く、帰国した主婦の方からの「地域に馴染めない」「カルチャーギャップを感じる」といった相談を多く受けるようになったのです。同じ経験を持つ者として、アドバイスをしているうちに、彼女たちの中から自主学習グループである「T・G・A・L」の活動がスタートしました。

グループ名である「T・G・A・L」は、「Think Globally, Act Locally」の略で、「地球的視野で考え、暮らしに根ざして行動しよう!」という意味です。海外生活体験者が、帰国後に子育ての悩みや地域とのかかわり方などを話しあう活動からスタートし、現在では、それぞれの国での子育てや、学校や地域でのボランティア経験などを、現在住んでいる地域で活かそう、という活動に発展していきま

ました。
 具体的な活動内容は、子育てや国際理解教育などをテーマとした講演会や国際理解プログラムの出前講座の開催、小



支援センター内ミーティングスペースでの話しあいの様子

冊子の出版、帰国子女と保護者への調査など多岐に渡っています。

中でも本年3月に発行した「学校ハンドブック」は、学校をはじめ、教育関係者などに大変好評です。これは、私たちがエッジモントで生活していたときに、実際に地域で配られていたハンドブックを翻訳したもので、地元では、地域と学校を結ぶための手引書として、通称「ブルーブック」の名で親しまれています。

エッジモントではこの冊子が子どもが無にかかわらず、全家庭に配布されます。学校と地域の情報が共有でき、地域の人がいずれもどんな形でも学校行事や運営に参加できるようになっていて、実際に参加率は、とても高いんです。この冊子を英語から日本語に訳しただけでなく、現地での体験談とアメリカの教育システム概要を併記して、まとめました。

生涯学習を支援する立場として

横浜市教育委員会での私の仕事は、市内18区の生涯学習支援センターのバックアップです。具体的には、各区への情報提供や学習相談員の研修を担当しています。

各区の生涯学習支援センターでは、学習相談員が、個人が生涯学習を行いたいときの相談に対応しています。講座情報

を提供したり、情報の収集の仕方をアドバイスするのが相談員の主な仕事です。最近ではグループ活動の相談も多いですね。グループ運営に関して、マネジメントの方法や他のグループとのコーディネートなどの情報を提供するんです。また、こつこつとした業務が「まちづくり」にも

かわつてきてくるようになりました。さらに、生涯学習に必要な「場」を提供する業務もあります。ミーティングスペースの提供や、コピー機など機材の貸し出しもその一つです。こつこつとした生涯学習支援センターの役割は今後ますます重要になることでしょう。

互いに対等な関係で成長していける場

私は、自分も含めて生涯学習によって、人がどう変化していくか、というのを見てまいりました。

とくに生涯学習グループに所属していると、合意形成の仕方が、企業とはまったく異なることに気づかれます。企業社会では、効率や利潤をいかに追求していくか、という合理性が第一になり、会議の時間も限られています。学習グループでは、参加する人々が皆、納得するまで長時間かけて話しあうこともあるし、話が元に戻る場合もあります。一見、非



学校ハンドブック-ニューヨーク州エッジモント学区ブルーブック全訳-



都築区生涯学習支援センター

んですね。皆が互いに教えあい、学びあう、これが生涯学習の特徴だと考えられます。

私は今後も、学習者やそこにかかわる人々すべてが、互いに対等な関係で学習を核に成長していける場をつくっていきたくと考えています。そのためには、まず、個人が自己を確立していく必要があります。自己肯定、自己尊重の気持ちがないとその場にかかわる人々の関係が成り立ちません。そのうえで、さらに豊かなコミュニケーション力が必要になってくるでしょう。

合意形成のプロセスでは、それなりの苦労もあるでしょう。しかし、行き着くところでは皆が納得できる場になるよう援助していきたいと思っています。欧米社会のすべてにならう気持ちはありませんが、日本のよさを大切にしつつ、横並びではなく違いを大切にする関係を築いていきたいと思っています。

効率的ですが、そのプロセスこそが、一人ひとりが納得するために必要なことなのです。

人は生涯に渡り、いろいろな場面で学びますが、それまでの経験、知識、能力を活かし、自分の関心や必要に応じて学習していきます。そして、そのプロセスでは「誰が生徒か先生か」という「めだかの学校」の童謡にたとえられるように、誰が先生、生徒ということではない

たけはら いずみ
大学では教育学を専攻。大学在学中に岩手県田野畑村、福島県山都町での地域活動をきっかけに、社会教育に興味を持つ。他に国際交流活動、養護施設などで学習指導を体験。フランス、アメリカでの子育て、地域活動を経て、1997年より横浜市都築区社会教育指導員として働く。2001年から横浜市教育委員会生涯学習課に勤務。現在に至る。

森美術館 パブリックプログラムキュレーター
杉浦 幸子さん

美術館には学びのきっかけとなる刺激があふれている

杉浦幸子さんは、美術館での教育プログラムを手がけるギャラリー・エデュケイター。美術館や博物館で開かれるギャラリートーク、レクチャー、ワークショップなどを企画・実施するのが主な仕事だ。そのきっかけとなったのは、留学後に始めた、子どもたちを美術館に連れて行く活動だったという。

美術館は閉じているという印象

美術館での教育活動を志すようになってからは、イギリスの大学院に留学したことがきっかけです。美術と教育を組み合わせたら、社会に向かってもっと美術が開かれるのではないかと。そう思ったのが、勤めを辞めて留学する少し前のことでした。

美術史を学んでいた大学生の頃はそこまで頭が回らなくて、美術は閉じているという印象で終わっていました。その結果、「美術には縁がなくていいや」と普通の会社に就職しましたが、しばらく働いて美術関係の仕事を始めたいと思ったと

き、「教育とか人が学ぶ、ということにかかわったら突破口が開けるかな」とばく然と思ったのです。

ただ、その時点では具体的に何をしたらよいかかわからず、これで行こうと決めたのは、イギリスでエデュケイターや先生が行う、ギャラリートークやワークショップなどを見て、美術館での教育活動というものがあるのを知ってからです。美術館が教育施設だというのは、欧米では当たり前の考え方です。しかし、ギャラリー・エデュケイターという職業は、当時日本では一般的ではなかったため、フリーランスで始めることにしました。



ART アートから

「ペンギんくらぶ」と「いるかくらぶ」

帰国後、私塾のような形で地域の子どもたちを集めて美術館に連れて行ったのがスタートです。週1回の「ペンギんくらぶ」は英会話と美術館見学、月1回の「いるかくらぶ」は美術館での鑑賞ワークショップを行います。なぜ英語かというと、最初は親御さんのニーズが美術鑑賞にはなかったからです。それに私自身もイギリス帰りで、コミュニケーションツールとしての英語に興味がありました。そこで最初は、英語を教えるのと並行して、子どもたちを美術館に連れて行きました。



国際交流基金アジアセンターで行われた「ペンギんくらぶ」の鑑賞ワークショップ風景

ギャラリー・エデュケーターという仕事について周囲に話しはじめたのは、「べんぎんくらぶ」を始めて3年目くらい、1998年頃からです。その頃になつてようやく、フリーランスでギャラリー・エデュケーターの仕事をしている人間を必要とする組織や美術館などとの会いはじめました。

AAC (Arts for All Committee) の活動も、そうした中から生まれました。AACは、一般の方々の美術館学習に対する理解を深めるとともに、ギャラリー・エデュケーターという職業への認知度を高め、エデュケーター同士の交流や情報共有の場を設けることが目的です。現在は親子による美術館訪問をサポートするウェブサイトを「親子でびじゅつかん」を運営していますが、将来的には親子で美術鑑賞するためのプログラムや、美術館訪問の企画などを実施していきたいと思っています。

出合いの種をまくという役目も

ギャラリー・エデュケーターの仕事としては、美術館の来館者を対象としたワークショップなどを企画運営する以外に、学校が行う美術教育のプログラムに参加し、生徒や児童を対象にギャラリー

トークを行うことがあります。そうした学校を対象としたプログラムの場合、参加者のモチベーションにかなりバラつきがあるので、全員に喜んでもらえるようなプログラムの提供は難しいです。終わった後にアンケートをとると、「つまらなかった」と感想を書く生徒が必ず一人はいます。

反対に学校で行うプログラムのよい点は、多くの人にアートに触れあう機会を提供できること。アートへの指向は親御さんの影響が大きいものです。親御さんが興味を持っていなければ、その子どもは一生美術館に足を運ばないかもしれない。出合いがなかったかもしれないところに、出合いの種をまくことができます。それが、学校という環境の中で行う美術館教育のメリットだと思います。

子どもたちがアートに触れて変わるかという点、それは人それぞれです。幼稚園の子どもなどは無条件に喜んで見ているし、小学校の高学年くらいになると自分の考えと作品を照らしあわせ、「自分はこう思う」と主張する子どもが増えてきます。

子どもの場合、学ぶという意識がないまま、学んでいるのではないかと思えます。私自身も「これを学んでほしい」という強い気持ちはなく、「この出合いか

ら何かを学ぶのだから」という推測があるだけです。

アートの素晴らしさを伝えたい

知識を学ぶだけであれば、美術館でなくてもよいわけです。しかし、そこから情報を得て、何かを考えるきっかけにするのなら、それがとても起こりやすいのが美術館です。学ぶにはいろいろな刺激が必要ですが、美術館には良質の刺激がたくさんあります。それは本物だけが持つ刺激でもあり、色や形の面白さ、制作者の気持ちが見えてくるという刺激でもあります。

今は選択肢がとても多いので、何かを学ぼうと思ったとき、必ずしも「美術」が選ばれるとは限りません。むしろそれ以外のものを選ばれるほうが多いでしょう。しかし今、人々の関心が心を豊かにすることなどに向いていることもあって、本物のアートや芸術に対するニーズは強いといえます。

美術館における教育活動の広がりには、生きた学びの場として、美術館を広く社会に役立てていくという動きの現れです。美術館での教育活動にたずさわる私たちは、美術館の持つ、そうした役割やアートの持つ力を認識し、その素晴らし

さについて、より多くの人々に発信していきたいと考えています。



国立西洋美術館で行われた「べんぎんくらぶ」の鑑賞ワークショップ

すぎうら さちこ

1995年、英国ウェールズ大学カーディフ校教育学部教育修士課程美術館教育専攻修了。帰国後、ART&CHILDを主宰し、子どもから大人までを美術館に連れて行く活動を始める。99年から2001年まで、横浜美術館子どものアトリエの指導補助スタッフ。2001年、横浜トリエンナーレ2001教育プログラム担当。現在は2003年10月に開館する森美術館のパブリックプログラムキュレーターとして活躍。AAC (Arts for All Committee) 事務局代表、武蔵野美術大学非常勤講師。

山形県大江町教育委員会 教育長
渡邊 兵吾さん

地域の人たちが学校教育に参加できる仕組みを

休校になった小学校を利用し、2002年6月にスタートした「大江はてな学興」は、地域住民をも巻き込んだ新しい形の教育活動として、各方面の注目を浴びている。その仕掛け人の一人である渡邊兵吾さんは、大江町初の民間出身の教育長。地域の教育に情熱を傾ける渡邊教育長に、地方の町における「学び」の現状や課題などをうかがった。



LOCAL 地方から

で必ず返してくれる。それは社会にとっても必要です。そのためにも、こういう場が必要なのだと思います。

その学校でしかできない教育を

地方では、町中心部への人口流入によって、周辺の山村地域が過疎化するという問題を抱えています。大江町はその典型です。その結果、山間部では児童生徒数が減少し、休校に追い込まれる学校が増えています。「はてな学興」の舞台となった七軒西小学校も、そうした学校の一つです。

その背景には、山村での暮らしが立ち行かなくなっていることが挙げられます。林業をはじめとする地場産業が衰退し、人々は職を求めて村を出ていく。あるいは、便利さや快適さを求めて町の中心部に移住する。残った家庭の子どもや親たちも、児童生徒の少なくなった地元のを学校を避けて、町中心部の学校に通わせようとしています。

大江町では、片道5kmを毎日歩いて通う小学生がいるほどです。「学校を統合しますから、こっちの学校へ行ってください」だけでは、だれも行きたがらないのは当然です。この学校でしか学べないカリキュラム、この学校だからこそでき

休校の学校が舞台の「はてな学興」

「大江はてな学興」は、野外での遊びや学習などを通じ、自然との触れあいや学ぶことの楽しさを体験してもらうことが目的です。対象は町内の小学生。昨年初めて春、夏、秋の3回行い、小学生と教員のべ100名が参加しました。

「はてな学興」という名前は、子どもたちが出会った「?（はてな）」について、子どもたち自身でその答えを見つけ、学びを興そうという意味でつけたものです。木を使った工作や山菜採り、芋煮会など、自然の恵みを満喫することを中心に、地域住民の方々に講師を迎えて、マ

グロの解体やそば打ち体験、昔話の朗読会なども実施しました。

実施してみて感じたのは、参加した子どもたちが非常に明るく、楽しげだったこと。「イヤだ」「つらい」「面白くなかった」などという言葉は、一切聞かれなかった。それが一番の成果であり、収穫だったと思っています。守らなくてはならないルールは最低限にし、意味のない規則を設けなかったことが、ああいうムードにつながったのだと思います。

無償の愛情を子どもたちに

「はてな学興」は、「休校になった校舎

を利用して何かできないか」というところからスタートしましたが、その真の目的は、学力を高めるとか、野外での活動を楽しむとか、そういうことではないと思っています。子どもたちが、学校教育の場では不足しがちな大人たちとの触れあいを通じ、心からの信頼関係を結ぶことにあります。

私は、大人の無償の愛情が子どもに伝われば、それで教育の目的は達したと思っています。無条件で自分たちのことを心配してくれる、そういう大人たちがいることがわかれば、子どもは何も言わなくてもわかってくれます。その愛情はすぐに返ってこなくても、いつかどこか



おもしろ算数・理科



お楽しみわくわくグルメ(牛もも肉の丸焼き)



そば打ち

る教育というものを考えてみる必要がある。親や子どもたち自身が「あの学校は授業の内容がいいから通ってみよう。カリキュラムが面白そうだから行ってみたい」となるように、教育の中身を変えていくことが求められているのです。私は文部科学省の基準をベースにしながらい、そういうことをするのも可能だと考えています。山村教育でも森の問題でも生物でも農業でもいい。その学校でしかできない教育を行うことが、地方の学校が生き残っていく唯一の方法ではないかと考えています。

本能を失いかけている子どもたち

今の子どもたちは、あまりにも世話を焼かれすぎて、人間としての本能を失いかけていくように感じます。たとえば、運動会では徒競走を取りやめる学校があ

るが、そういう風潮が子どもたちの健全な競争心までも奪っているように思えます。子どもたちの興味や関心に合わせず、伸ばさなければいけない能力が伸びていってない。昔はやりたくないことでも、学校でそうしろと言われれば、いやいやながらもやったものです。それが子どもの能力を伸ばし、「生きる力」をつけることにつながったように思います。

また、教育の現場を見ると、教室から子どもたちの心からの笑いが消えたような気がしてなりません。昔は「わかつ」などと言ったものですが、腹を抱えて笑うぐらいの盛大な笑いがあつた。これは教室だけの問題ではなく、職員室からもそういった笑いが消えたように思います。学校をもっと笑いの多い場にする必要があります。

先生自身に余裕がないのも問題です。それに何でも杓子定規に考えすぎる。もっと柔軟にやったほうがいい。私は現場主義でいいと思っています。やってみて失敗したら、また違う方法や別のことを試してみればいいのです。

学校教育に地域住民を取り込む

最近「学社連携」などという言葉がクローズアップされていますが、私は「社

学連携」と「社会」が先に来るのが正しい姿だと思う。地域社会あってこそその学校だと思つからず。地域の人々がもっと学校に対して要求したり、先生方といっしょに学校教育を支えあつような、そういう関係にならなければと思つています。それには、地域住民の方たちをもっと学校の中に取り込んでいく必要がある。

地方には、ものすごい宝がいっぱい埋まっています。非常にスマートで賢い集団もたくさんある。この大江町にも、何百年も続いた山の暮らしの中で培つた、知恵や力を持った人たちが大勢います。「はてな学興」でも、いろいろな特技を持った個人やグループがボランティアとして協力してくれました。そういう人たちに学校教育に参加してもらつたことで、学習の幅が広がるだけでなく、子どもたちが実社会とかわるだけのことの大切さも学べるのではないかと思っています。これこそ山の学校だからできる、新たな学びの発明なのです。

わたなべ ひょうご
1945年生まれ。北海道大学文学部卒業、その後も学生生活を送る。75年東海大学山形高等学校英語教諭に着任した後、教頭就任。この間、山形大学教育学部研修生として、「地方と都会」に関する研究を進める。2001年9月より大江町教育委員会教育長に就任し、現在に至る。比内鶏や北海道犬(アイヌ犬)の保存などを趣味とする。好きな詩人は宮澤賢治。